

スペクタクル新作能「光秀」×甲冑隊 福知山

【企画者】(株)伝楽舎代表上田敦史 能楽小鼓大倉流 重要無形文化財総合指定保持者 丹波市

【アイデアのビジョン】

福知山城を舞台に世界無形文化遺産「能楽」に新たな作品、新作能「光秀」を創出する。

昨今新しい研究や大河ドラマ等で歴史的評価が見直されている明智光秀公の人物像を盟友細川幽齋の視点から戯曲として描き出し世界に発信する。

丹波の能楽師・新作能作家として活動する上田敦史が詞章を執筆し、詞章監修に明智光秀の子孫であり歴史研究家・作家の明智憲三郎氏、能楽演出監修に明智家と親戚関係のある観世流シテ方山階彌右衛門師、丹波福知山明智光秀研究会、丹波福知山手作り甲冑隊はじめ丹波黒井城や亀岡市、長岡京等の地元甲冑隊との連携によって、当地の誇り、象徴的人物「明智光秀」「細川幽齋」「細川忠興」「細川ガラシャ」の物語を構成し、苛烈な戦国時代を生き、運命に翻弄された彼らの思いを未来へと語り継ぐ新作能を制作し、福知山城本丸広場特設野外ステージで上演する。

単発企画ではなく、今後何世代にも渡り上演可能な能本として完成させることで、台本自体が福知山市にとって永続的価値を持つ文化財となるよう制作に当たる。またアマチュアの謡曲愛好者にも語り継いでもらえる作品とする。

プロの能楽師だけで上演する通常演出に加え、今回は丹波の各地域の甲冑隊が演能に参加し、光秀最後の戦「山崎(天王山)の戦い」を細川幽齋の見る幻の中に再現するというスペクタクル演出を加え、見どころとする。

演者が変わっても再演が容易であるよう、伝統的な能としても違和感のない節付・型付をし、次世代能楽師へと継承出来るようにする。

専門家に撮影を依頼、完成した動画は福知山市の広報に活用していただく。また後日動画の英語バージョンも制作し、コロナ後のインバウンド誘致にも対応出来るようにする。

【あらすじ】

慶長5年、妻ガラシャを失った細川忠興は徳川家康の許しを得て、時の福智山城主小野木重勝を攻め、城を奪還した。忠興は父細川幽齋を福智山城へ招く。城を訪れた幽齋の脳裏にはかつてこの福智山城を築城した盟友との日々が懐かしく思い出だされ、同時に言い難い寂しさや虚しさが去来するのであった。幽齋は城を眺めつつ亡き友を弔おうと物見やぐらへ上がろうとする。そこに人がいるのを見て声をかけると、それは愁いを帯びた老人であった。老人は幽齋親子に「このような所で何事をなされておられるのですか?」と尋ねるので、かつてこの城を共に築城した惟任日向守殿を弔うのだと答えると「光秀といえば主君信長様を裏切った謀反人ではございませんか。そのように手厚く弔うのは不審なことです」と言うので一旦怒りを覚えるが、男の醸し出す不思議な雰囲気誘われ、光秀の天下泰平への思いを語り、己が最後に手を差し伸べられなかったことへの悔恨を語ると、老人が涙を流すので、不思議に思った幽齋は「明智にゆかりのある者か?」と尋ねると、今は何を隠そう我こそ惟任日向守明智光秀の霊だと名乗り、幽齋の回向に感謝を述べると、後ほど再び現れて、かつての戦いの有様を夢幻の内に見せるので、願わくば夜もすがら供養を続けて欲しいと言ひ残し消え失せる。幽齋は光秀の福智山治政について在所の者に詳しく話を聞いた後、なおも読経して待っていると、武者姿の光秀が現れ、天下を目前としながら、最後は無念の死を遂げた自分であるが、それも全て憂き世の習いであり、因果の定めと受け入れている。今は恨みなど何もないが、ただ一つ思い残す

のは長年共に戦った盟友と天下泰平の世をついに築けなかったことであると言ひ、自身の半生を振り返り、主君信長との蜜月時代から本能寺の変へと至る心境、その後の山崎の戦いの有様を幻の内に見せる。やがて夜も白々と明け、福智山城に柔らかな朝日が差すとその光に溶け込むように幻は消え失せるのであった。

【福知山の皆様へ】

丹波地域は現在の「能楽」のルーツの一つ「丹波猿楽」発祥の地として知られ、現人間国宝の能楽師を擁する観世流の大名跡「梅若家」が誕生した土地です。丹波猿楽の一座であった梅若座は織田信長の寵愛を受け、その梅若大夫は明智光秀の家臣でもありました。そのため本能寺の変後は一時没落しますが、細川幽斎の推挙により徳川家康に仕える事が出来、現在も観世流を代表する家柄です。

当企画考案に際し、様々資料を調べていますと、この新作能に登場する方々は、当時の能楽振興に大いに関わっていた事がわかり、不思議な心持ちです。新作能制作に関わってくださいている皆様も自然と明智光秀にご縁のある方々となりました事も奇縁を感じております。

地元の皆様の思い、光秀にご縁のある皆様の思いが詰まった新作能によって、歴史に裏付けされた本物の地域伝統文化を生み出し、未来に継承し、これからの福知山の宝物としていただければ幸いです。

新作能「光秀」

演出監修 山階彌右衛門

詞章監修 明智憲三郎

ワキ 細川 忠興

前シテ 老人

後シテ 明智 光秀の霊

ツレ 細川 幽斎

間狂言 物見の兵

【新作能光秀詞章 上田敦史著】

忠興「かやうに候者ハ。三河殿に仕へ申す細川忠興にて候。さても先の合戦において。

妻伽羅奢ハ三成方に捕らはるゝ事を拒み。小笠原小斎の介錯にて命を失ひたる事。

誠に不憫に存じ候。時の趨勢決したれども。この無念を晴らさんため。この程福

智山城に攻め入り。石田方小野木重勝を降し候間。只今代はって入城仕り候。此

処こそ伽羅奢が父惟任日向守。光秀殿普請の城なれば。二人の手向けとなりぬら

ん。また我が父藤孝ハ。幽斎玄旨と名乗って出家致し。様々の事今なほ心に掛か

りたると推量申し候程に。父をば城へ招き申して候。やがて共に古を偲ばゞやと

思ひ候

幽斎「来てみれば此処ハ憂き世に秋の暮れ。清けき月に挿す枝の。細き楚の散り給ふ。

あら儂や候。亡き人の面影添へて月の顔。そゞろに寒き。秋の風かな

忠興「あら何ともなや。父の独り言を仰せ候よ。いかに申し候。遙々の御下向まづ以つて祝着申して候。久しく向顔なき不孝御免あらふずるにて候

幽齋「某ハ世を捨て人にて。向顔など不用の事。まづハあれなる櫓に上がり。懐かしき城を眺め。友を偲び御経をも読誦せばやと思ふハ如何に

忠興「御計らひ尤もにて候。さらばかう渡り候へ

老人「それ人の栄枯盛衰ハ月の如く。満つも欠くも等しかるべき。永く苦しき戦の世とて。必ず天下治まれば。万民樂しむ世となるべし

忠興「や。いかに上なる人。これにハ何とて上がりたるぞ

老人「我ハ卑しき中間なれども。乱世を正す麒麟を待ち望む者にて候

幽齋「興がる事を申す者かな。まづ此方へ来たり候へ

老人「これハ御殿とも知らずご無礼仕りて候。恐れ多き申し事にて候へども。この所に何の御用の候ぞ

忠興「我等久しくこの城に参らず候程に。城の景色を眺め古を偲び。日向守の菩提を弔ひて候よ

老人「何と日向守とハ。方々の主君弑逆せし大罪人。謀反の者明智光秀にてハ候はぬか。

かやうに懇ろに弔ひ申すとハ。不審なる事にて候

忠興「こハ痴れ者斬つて捨ちよう

幽齋「しばらく。我等ハ保身のため。出家と申し日向守を見捨てし無情の者。いかに老人。かの日向守光秀殿ハ。この戦乱末世を終はらせんと。命を燃やしたる真の武士なり。我等こそ彼を弔ひ申すに能はぬ者にて候よ。や。老人の落涙するハいかに。さてハ明智に縁ある者か。名を名乗り候へ

老人「藤孝殿の御言葉に。迷ひの雲も晴れぬべし。今宵その名ハ明暮の。これこそ惟任日向守。明智光秀の幽霊なり

地謡「その名を聴くよりも。その名を聴くよりも。千々に心も乱れたる。忠興頭を地につけて。聊爾許させ給へやと。畏まってぞ伏しにける

幽齋「幽齋ハ手を合はせ

地謡「許させ給へ南無阿弥陀。これも菩提の種なれば。今宵ハこゝに留まりて。夜すがら回向申すなり。思へばこの世は。常の住み家にあらずや。草葉に光る白露も。

水に宿る月影も。あやしきものと思ふべし金谷に花を詠ずれば。無常の風に誘はれ南楼の月を眺むれば。有為の雲にや隠れなん

老人「散りぬべき。時知りてこそ世の中の

地謡「花も紅葉も丹波なる。福智の山に今一度。真の姿を現して。夢幻を見せんとの。言葉堅き石垣に積もるもみぢ葉吹き散らし。風に紛れて失せにけり吹風の山に失せにけり〔中入〕

幽齋「されば残る光秀の執心 なほも昔を返さんと

忠興「福知の山にこだまする。福知の山にこだまする。嵐と共に声添へて。この御経を
読誦する

幽齋「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏

光秀「あら有難の御弔ひやな。思ひを残す我が城に。心も澄める夜声の読誦。戦国乱世の無常の波に。沈みし恨みも涙の露。ただ御身と共に泰平の。世を築く事叶はねば。娑婆に執心残すなり。

地謡「昼も無く。夜も無く。天下布武の礎ならんと。永き修羅道に。身を置く苦しみ。浮かばせ給へ。南無阿弥陀仏

幽齋「げにや在りし姿に桔梗紋の。甲冑を帯する光秀殿を。今見る事の懐かしさよ。過ぎにし戦の数々御物語り候へ

光秀「まづ忘れえぬハ本圀寺

地謡「無勢なれども大軍を恐れず。五日御公方を守り抜くハ。あっぱれ十兵衛見事なりと見出され。やがて織田を頼み参らせたり

光秀「天王寺砦にてハ

地謡「紀州雑賀の鉄砲術。本願寺頭如の門徒。進者往生極楽退者無間地獄。死をも厭はぬ軍勢の。怒涛の如く寄せ来れば。つひに討死覚悟しける所に。大殿十兵衛死なすべからずと。御自ら助け給へば

光秀「この報恩に光秀ハ

地謡「覇道を照らす焰たらんと。誓ひし事も真実なり。戦乱の日ノ本に。泰平築く我君と。頼み申せし修羅の道。行けども限り無き。信賞必罰に。弥猛心の明日も無き。人の命の軽き世の。無情の世こそ儂けれ

光秀「その上日ノ本を。治めし後に明国を

地謡「平らげんとの謀り事。諫め参らせども。力無き身の悲しさよ。真の仁義礼智信の。

武士に非ざれば。天に仇成す魔王にぞ。ならせ給ふか痛はしや

光秀「最早御諫めも虚しかるべき。末世の闇を晴らさんため。我知略を巡らす。西国への軍兵を調べ。龜山にて時節を待つ。時ハ今 天も満ちたり水無月に。桔梗の花の散りたるハ無し。我軍六月一日亥の刻に。夜陰に紛れ出立せり。古参の内蔵助秀満次右衛門。庄兵衛伝吾の率ゐたる。明智の精鋭一萬餘騎。沓掛にて兵を休めし所に

地謡「つひに光秀下知して曰く。我等の攻むべきハ西国にあらず。これより本能寺へ討ち入らん。方々疑ひあるべからず。

光秀「これぞ衆生済度と。言へど涙も堰きあへず

地謡「人間五十年。化天の内を比ぶれば。夢幻の如くなり。一度生を享け。滅せぬ者のあらぬ世の。無常の闇に迷ひけり

光秀「かくて我大殿弑逆仕り。泰平の世を見据ゑし處に。げにも口惜しき事かな 筑前既に毛利と和睦を成し。尋常ならざる大返し。返すくも小賢しき事なれども。我等も兵法を以って迎へ打つ。されば狭き谷なる大山崎にて。天下分け目の戦を始めんと

地謡「合戦の火蓋ハ先陣の。合戦の火蓋ハ先陣の。鉄砲隊と頼みけるに。頼みなきハ人の心。何とかしたりけん。味方の鉄砲ハ。踵を返して此方へ向かひ。雨の如くに乱れ打つ。驚き騒ぐ味方の勢。驚き騒ぐ味方の勢。敵もこれぞと渡り合ひ。大勢乱れて戦ひたり 〔合戦〕

光秀「あら情けなや我志果たす事叶はず。無念と野に散りたる事。これも因果の定めなり 後の世に。思ひ託さん今この時。国々ハなほ長閑なる天の下。我ならで。誰かハ植ゑん一つ松

地謡「誰かハ植ゑん一つ松に。枝を鳴らさず吹く風の。音こそ心して。語り起こせや偲び草。霞む姿ハ日に向かひ。懺悔の夜ハ白々と。明くる朝風福智山。明くる朝風福智山。光と共に失せにけり